資料１－１６

記事で振り返るAMRこの1年

2018年9月～2019年9月
共同通信社配信記事から抜粋、要約

共同通信社
吉本明美

2018年9月

大切な患者の納得　耐性菌対策　国の行動計画から2年

・第１回 AMR対策普及啓発活動厚生労働大臣賞を受賞した奈良県の「まえだ耳鼻咽喉科クリニック」の取り組みを紹介。ごく普通の耳鼻科で、抗菌薬の適正使用が「当たり前」になるまでの経過とは。

- ２００３年の開院当初は風邪や中耳炎の子に当然のように抗菌薬を出していた。
- 耐性菌による中耳炎では、治らずに別の薬、それでも治らずまた別の薬…という例も。「これでいいのか」と疑問を募らせた院長の妻で薬剤師の前田雅子さんが、鼻水などの検体を薬品で染め、顕微鏡で細菌の有無を調べる「グラム染色」検査に着手。
- 半信半疑だった稔彦院長も、検査の有用性を確信。抗菌薬が減り始めたが「ここは薬をもらえないからよそへ行こう」と言う患者も。２００７年にモニター付きの顕微鏡を導入し、画像を見せて抗菌薬の要否について患者に説明を始めた。
- 抗菌薬が大きく減ったのはそれから。今では「薬はしばらく待ちますか」と自分から言う人もいる。

（https://www.47news.jp/medical/shinseiki/2948289.htmlで全文閲覧可）

◇世界保健機関（WHO）の発信情報

2018年11月

抗生物質使用、国や地域で14倍の格差

【ジュネーブ共同】世界保健機関（WHO）は12日、抗生物質（抗菌薬）の使用量に関する初の報告書を発表した。65カ国・地域の調査で、2015～16年に千人当たりの1日使用量（DDD）が最も多かったのはモンゴルの64・41、最少はアフリカ・ブルンジの4・44で14・5倍の差があった。

過剰摂取の問題が存在する一方で「多くの人の命を救う抗生物質を十分に利用できていない国もある」とWHO。

2019年01月

筆頭は大気汚染、目立つ感染症関連 国際保健への10大脅威

世界保健機関（WHO）は、2019年に特に注意を要する国際保健への10の脅威を発表した。筆頭は「大気汚染と気候変動」。

感染症関連は10項目中6つを占めた。次の新型インフルエンザ流行、抗生物質が効かない薬剤耐性菌の拡大など。有効なワクチンが存在するのに接種しないことも、感染症制圧の歩みを逆戻りさせる脅威と位置付け。

◇国内ニュース、話題

2019年02月

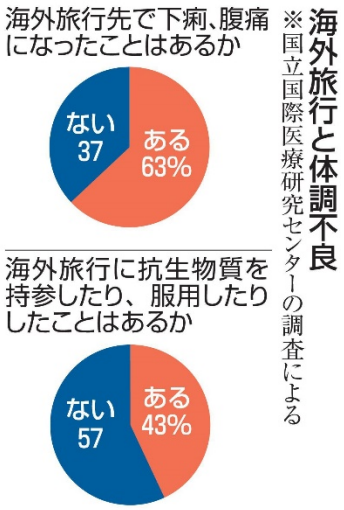
「変えていく念のためから明日のため」 薬剤耐性啓発の川柳入選作

国立国際医療研究センターの「AMR臨床リファレンスセンター」が募集した川柳の入選作品。
１８１６句の応募。金賞は「変えていく念のためから明日のため」。
銀賞は「飲み薬余り物には福はなし」「抗菌薬正しく使い次世代へ」。

2019年07月

海外旅行の下痢　薬に注意 耐性菌持ち込みの恐れ

薬剤耐性菌を海外旅行先から持ち込まないでと、国立国際医療研究センターのチームが、海外で下痢などの体調不良を起こした際の対応に注意を呼び掛け。
耐性菌問題が深刻な東南アジアなどに旅行経験がある20～60代の男女へのインターネット調査では、抗生物質（抗菌薬）を海外旅行に持って行ったり、服用したりしたことがある人は43％。年齢別では20代男性が高率。抗菌薬は効く細菌の種類が決まっており、合致しないと効果がないばかりか、耐性菌を増やす原因にも。残薬の服用はやめて、と同センター。



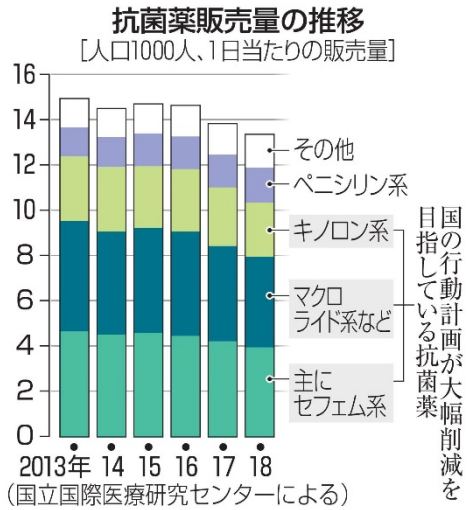
2019年04月

抗生物質の販売量減少　適正使用啓発の成果か

抗生物質（抗菌薬）の国内販売量が減少傾向にあり、昨年は5年前と比べ10・7％減ったことが、国立国際医療研究センター（東京）の集計で分かった。

AMR（薬剤耐性）臨床リファレンスセンターの具芳明情報・教育支援室長は「本来抗菌薬が不必要な風邪などへの処方が減った結果とみられる」と分析。

１６年まで横ばいだった販売量は１７年に１３年比で７・３％減少。１８年はさらに減った。



（https://www.47news.jp/medical/shinseiki/3522946.htmlで全文閲覧可）

2019年08月

「風邪で抗生物質」に地域差　協会けんぽが初調査

- 　風邪で医療機関を受診した患者に抗生物質（抗菌薬）が処方された割合は、2017年度では奈良県が48・9％で最も高く、福井県が26・6％で最も低いことが、全国健康保険協会（協会けんぽ）が初めて実施した都道府県別調査で判明。全国平均は35・9％。地域差が目立つ。
- 「急性上気道炎」との診断を受けた協会けんぽ加入者のレセプト（診療報酬明細書）を、16年6月分から18年5月分まで調べた。

2019年9月

抗生物質、危うい供給 学会が国に対策要請

外科手術時などに使われる、ある重要な抗生物質（抗菌薬）の供給が、海外の製造現場の事情で今春から長期間停止。影響で代替の抗菌薬も品薄となり、感染症治療の現場は大きく混乱した。

入手しやすい抗菌薬を漫然と使えば、薬剤耐性菌を増やす恐れもある。「少ない選択肢の中で患者さんへのマイナスをどう最小限にするかを考えつつ、耐性菌も防ぐ必要があり、綱渡りの感覚だ」と、ある感染症医。

日本化学療法学会など感染症関連の4医学会は、抗菌薬の供給が不安定なのは製造の過度な海外依存が原因だとして、国に見直しを要請した。

（https://www.47news.jp/medical/shinseiki/4141962.htmlで全文閲覧可）